古今集の「忘れ草」をめぐって

九回卒　江崎鈴子

〔一〕古今和歌集巻第十五恋歌七六五と墨滅歌一一一一の考察

題しらず　　読人しらず

忘れ草種とらましを逢ふことのいとかくかたきものと知りせば（古今・七六五）

この歌については、夙に契沖は『余材抄』の中で「逢事のかくばかりかたからん物とかねてしらば、我もしひて忘れまし物をの心也。」と言いそれを踏襲して『打聴』では、忘れるようにしたいというのを忘れ草の種をとって植えたいと言っており[注1]『遠鏡』では忘れ草の種をとっていたならそれを蒔いて生やして恋を忘れるようにしたいものと解釈している。[注2]窪田空穂の『評釈』も「『種とる』は、種を蒔いて、それを生やす意。忘れ草のない季節の心。忘れ草の種をとって生やしたいものだ。」と言い、最近の注釈書でも「これを植えておくと悲しみを忘れる俗信があった。種を取っておくのだったよ。[注3]」「自分が忘れ草の種をまいてそれで恋の懊悩を忘れたい。[注4]」「忘れ草の種をとっておくのだった。それをまいて忘れ草を茂らせればあの人を忘れることができるのにという心持。[注5]」と概ね一致しており、異見がさしはさまれたことはない。しかしこの「種とらましを」はどうしても、従来の説のように解釈しなければならないのであろうか、疑念がないでもない。

古今集の歌を解釈する場合、古今集に見える他の歌の用例が最もよい注釈の役目を果たす。歌の場合は歌の用例が、散文の場合は散文の例が適当であることは言うまでもない。されば、古今集の中の「忘れ草」の用例を求めてみると

題しらず　　読人しらず

恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひしげるらむ（古今・七六六）

題しらず　　宗千朝臣

忘れ草枯れもやするとつれもなき人の心に霜は置かなむ　（古今・八〇一）

寛平の御時、御屏風に歌書かせ給ひける時、よみて書きける　　素性法師

忘れ草なにをか種と思ひしはつれなき人の心なりけり
（古今・八〇二）

あひ知れりける人の、住吉にまうでけるによみて遣はしける　壬生忠岑

すみよしと海人は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり　（古今・九一七）

の如く、「忘れ草」は恋の相手が自分を忘れる原因となるものである。即ち、「忘れ草」は「憂さを忘れる・人を忘れる」という詩経の故事[注6]からきた俗信ではあろうが、「『忘れ草』が夢にまで生い茂っているから逢えない。」「『忘れ草』があるためにあの人が私のことを忘れる。だから『忘れ草』が枯れて欲しい。」「『忘れ草』の種（原因）はなんと、つれないあの人の心であったよ。」と「忘れ草」の存在を忌避している点では一致している。しかも前掲した用例の歌意は、自分の思いを相手に留めておきたい、自分のことを忘れないで欲しいのである。とすると、冒頭の七六五歌の「忘れ草」も古今集の他の用例に従うのが穏当ではなかろうか。つまり「あなたは、『忘れ草』があるから私のことを忘れてしまう。だからなかなか逢うことがむずかしい。それで『忘れ草』の種をとって『忘れ草』が生えないようにしておきたい。」というのが歌の真意ではないかと思われる。従って、従来の諸注釈の「こんなに逢い難いなら、『忘れ草』の種をとっておけばよかった。その種を蒔き生やしたならば、こんな苦しみは忘れてしまうだろうに」という解釈には一抹の懸念が残る。むしろ、従来の解釈を改め「私を忘れる『忘れ草』の種をとって、生えないようにしておきましょうに。あなたに逢うことがこんなに難しいものと知っておりましたなら」と解すべきではないかと考えられる。

「忘れ草」と「種」との関係で、「種をとる」という表現には(イ)植えるためにとると(ロ)生やさないためにとるの二つの解釈が可能である。

古今集七六五歌の従来の注釈は(イ)「植えるために種をとる」という意味に解している。しかし、そのように解釈すべき用例をその時代に求めてみても管見に入る限り用例を見出すことはできない。「忘れ草」を生やして「つらい思いを柔らげるために植える」というのは前時代の万葉集にみえる発想・表現であり、例えば、

忘れ草垣もしみみに植えたれど醜（しこ）の醜草（しこくさ）なほ恋ひにけり　（万葉・三〇六二）

の歌があげられるのである。

(ロ)の「生やさないために種をとる。種をとって生やさないようにしたい。」というのでは、恋の相手と逢えない原因は、「忘れ草」があるからで、生やさないようにしたい、「忘れ草」が生えたら私のことを忘れて逢ってくれなくなる、即ち恋の相手が、私を忘れないでいてくれるためには「忘れ草」は勿論のこと、その種がなくなってほしい、種をとって蒔かないようにしたい、というのである。このような発想・表現は当時では何も特異なものではないようである。例えば

今はとて忘るる草の種をだに人の心にまかせずもがな

（伊勢物語二十一段〈岩波大系〉）

わすれぐさ　　はつせの中納言

わすれ草たねのかぎりははてななん人の心にまかせざるべく　（古今六帖・三八五三）

題不知　　和泉式部

たねをとるものにもがなやわすれぐさ枯れなばかかるあともあらじを　（万代・二六四二）

のように格好の傍証的役割を果たしている例が見られる。

そこで「逢ふことのかたき」をいまいちど検討してみたい。その原因には(イ)外的なものと(ロ)内的なものがある。

(イ)外的原因のの事例は万葉集に多くみられるのであるが、

ちぐまなに浮きをる舟のこぎでなば逢ふことかたしけふにしあらずは　（万葉・三四〇一）

のように旅・航行・兵役などの外的条件が原因となって逢えないのである。お互いの気持は逢いたいのだが、それには障害となる第三者的な原因があった。

(ロ)内的原因の事例は古今集以降にみることができるが

あふひ　かつら　　読人しらず

かくばかり逢ふ日の稀になる人をいかがつらしと思はざるべき　（古今・四三三）

のように本人の気持は逢いたいのであるが恋の相手が逢おうとしないから逢えない。相手の気持、内的条件ゆえに逢うことがかたいのである。とすると冒頭の「逢ふことのかたき」は内的原因によって逢えないと解するのが当を得ていると見做される。このように考察してくると、「忘れ草」も古今集の他の用例に照合して「相手が『忘れ草』のために自分を忘れる」と解するのが正鵠を得た解釈であることが分かるであろう。

古今集にみえる「忘れ草」のいま一つの用例

道知らば摘みにもゆかむ住江の岸に生ふてふ恋忘れ草（古今・一一一一）[注7]

は、墨滅歌の一つである貫之歌となっているが、古くから異論がある。『打聴』では、「万葉集一一四七番の

暇あらば拾ひに行かむ住の江の岸によるといふ恋忘貝

の忘れ貝を忘れ草に変え、ことばも少しずつ変えただけで全く同歌である」[注8]と言い、「貫之がこういうことをするはずがなく、貫之のよみ口ではない、墨滅歌としてけしたのもよい」[注8]と言っている。『余材抄』は万葉集の歌の類歌と見ている。『遠鏡』では、万葉の歌を意識して詠んだのであり、知らずに入れたのではない。又貫之の歌であろう[注9]と言及している。

このように諸説が同歌或いは類歌とみ、『打聴』に言っているように万葉集のしきうつしと考えても一向差支えないような歌ではある。ただ万葉集の中に見られる「忘れ貝」「忘れ草」[注10]は

暇あらば拾ひに行かむ住の岸によるといふ恋忘貝（万葉・一一四七）

わかの浦に袖さへぬれて忘れ貝拾へど妹はわすられなくに　（万葉・三一七五）

住の江にゆくといふ道にきのふみし恋忘貝ことにしあ

りけり　（万葉・一一四九）

秋さらばわがふねはてむ忘れ貝よせきておけれおきつ白波　（万葉・三六二九）

忘れ草わが下紐に着たれど醜の醜草言にしありけり　（万葉・七二七）

忘れ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れんがため　（万葉・三三四）

のように、恋の苦しさ・つらさを忘れようと、或いは自分の思いが激しいため、「忘れ貝」「忘れ草」を身につけ、その思いを柔らげようとするためのものである。「忘れ貝」もさることながら、「忘れ草」を身につけたり身近なところに植えたりすると、恋の懊悩も柔らぎ、苦しみも薄らぐという俗信によっているのである。古今集の「忘れ草」では「相手が自分を忘れる」という発想があり、「忘れ草」に対する両者は正反対と言べきである。

ところで、この古今集の墨滅歌一一一一番を万葉集のしきうつしとみるなら、万葉的解釈、即ち『余材抄』やその他の注釈のように「私の恋が激しく苦しい、『忘れ草』を身につけて柔らげたい、忘れたい。」とするのが穏当で自然であろう。なればこそ、却って万葉的ということでこの歌が墨滅歌となったのかもしれないと思われてくる。

これに対して小沢正夫博士の如く、「万葉集の歌に古今時代の類句・類歌を取り入れて新味を出そうとしている手法は貫之の作と考えても不適ではない」[注11]とすると古今集一一一一の歌は万葉から脱皮して、古今集的解釈がなされたとしても一向に不都合はない。即ち「あの人は最近とんと来なくなった。忘れ草があるからこそあの人は私を忘れる。道を知っていたらあの住の江に生えているという恋忘れ草をつみとりに行きたいものだ。」と解することもできよう。しかし貫之は

すみのえにふねさしよせよわすれぐさしるしありやとつみに行くべく　（古今六帖・三八四九）[注12]

などにみられるように万葉集的要素（忘れ草によって自分のつらさを押さえる）を多分にもって歌作りにのぞんでいる。この古今集一一一一の歌もやはり万葉集の歌と見なしていたらしいことは払拭しえない。それ故に墨滅歌であることを余儀なくさせられている原因[注13]がそのあたりにあるのではないかと思われる。

この古今集一一一一の歌を考察するに当たり、ここで見落してならないことは、万葉集では「住の江」であるからこそ「忘れ貝」であったのだが、「住の江」と「忘れ草」では必然的関連は見当たらない。古今集一一一一番では、その「忘れ貝」を「忘れ草」に改変したのは、新味を出したものと思われる。以後、この歌を踏まえて

わすれぐさ　つらゆき

すみのえにおふとぞききしわすれぐさ人の心にいかでおひけむ　（古今六帖・三八四七）

おなじ人

うちしのびいざすみのえへわすれぐさわすれて人のまたやつまぬと　（古今六帖・三八五〇）

徽子女王

わすれ草おふとしきけば住の江のまつもかひなくおいにける哉　（斉宮女御集九五）

のような歌が詠み継がれて行くが、かかる歌から「住の江」と「忘れ草」の固定化がはじまったのではないかと推察される。つまり「住の江」と「忘れ草」は切り離せない状態の固定観念が生まれた。一一一一歌の「忘れ草」と「住の江」では必然的な関連は見られないものの「忘れ貝」を「忘れ草」と詠んだところに、一面斬新しさがかもし出され、古今集以降の人々の共感が得られたのであろう。

〔二〕万葉集の「忘れ草」と古今集の「忘れ草」

「忘れ草」が万葉集にあらわれるものと古今集にみるものとでは、歌の背景にある作者の心情・作歌意識の違いがあることが指摘できた。万葉集に詠まれた「忘れ草」は左の五例である。

忘れ草わが下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり　（万葉・七二七）

忘れ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむがため　（万葉・三三四）

我が屋戸の軒のしだ草生ひたれど恋忘草見るにいまだおひず　（万葉・二四七五）

忘れ草わが紐につく時となく思ひ渡れば生けりともなし　（万葉・三〇六〇）

忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり　（万葉・三〇六二）

これらの歌では、自分の思いが激しいためその思いを柔らげようと、或いは恋の苦しさを忘れようと「忘れ草」を媒介として自己へ働きかけている。自己の感情を押さえる思いや、忘れたいという願望を「忘れ草」に託した歌といえる。この中三首は「忘れ草」を自分の身につけ、忘れる手段としている。他の二首は身近な自分の家の庭先でみることによって憂さを忘れるという当時の俗信を信じて、「忘れ草」の効験を期待している。そこには「忘れ草」の存在を歓迎し肯定している。自分のいとしい人や故郷に対するつのる思いが「忘れ草」に託され、感情の吐露は自己との対峙として表現されている。恋の憂さや苦しみを忘れさせるという「忘れ草」や「忘れ貝」は、相手が自分を思っているから、相手が自分の夢に現われるという上代人の俗信や生活感情と揆を一にするものと言える。

古今集には前述の六例があるが、これらの歌は「忘れ草」があるために、相手が自分を忘れるという観点に立ったうえで歌が詠まれている。相手から忘れられないように、忘れないで欲しいため、思い出してもらいたいために、相手に自分の気持を留めておきたい未練がましい歌となっている。歌の底流にある心情には現代のワスレナグサに寄せる思いに通じるものがある。

これら古今集の歌では「忘れ草」があるが故に相手の心が自分から離れる。「忘れ草」が恋の邪魔をする、願わくは「忘れ草」がない方がよい、「忘れ草」が枯れて欲しい、と「忘れ草」の存在を嫌っている。万葉集の歌と比較する

と、「忘れ草」を契機にして自分の感情を他に働きかける歌であることが看取される。

なぜ万葉集と古今集ではこのような違いがみられるのであろうか。ここに注目すべき例がある。柿本人麻呂が官命により都へ旅立つ折りに、石見における妻依羅娘子が詠んだ歌

な思ひと君はいへどもあはむ時いつと知りてかあが恋ひずあらむ　（万葉・一四〇）

の一例によってあますところなく言い尽されていると言える。即ち「な思ひ（自分のことをそう思うな）」と人麻呂が娘子に言ったのは、妻が人麻呂を恋い慕う愛情のあまりに強く、深きが故に、苦しくて出立ができ難かったからであろう。当時の人々の夫婦愛、恋情がいかに深く温かかったかが胸を打ってくる。そうであるからこそ

小墾田の板田の橋のこぼれなば桁よりゆかむな恋ひそわぎも　（万葉・二六四四）

ひとごとを繁みこちたみあはざりきこころあるごとな思ひわがせこ　（万葉・五三八）

春去れば先づささくさの幸くあらば後にもあはむな恋ひそわぎも　（万葉・一八九五）

あれなしとなわびわがせこほととぎすなかむさつきはたまをねかさね　（万葉・三九九七）

のように、自分のいとしい相手には、「そんなに私を恋慕ってくれるな。」「私のことを思ってくださるな。」という表現になり、激しい自分の思いや恋の苦しさを「忘れ草」に託し柔らげようとするのである。そこには、内面的な「な恋ひそわぎも」「な思ひそわがせ」「なわびわがせこ」と、激しい命がけの思慕の情が切々と胸に迫ってくるのを禁じ得ない。「忘れてください」と「忘れないでください。」と比較して、愛情は何れが深いか言うまでもなかろう。

古今集では「な恋ひそ」「な思ひそ」という表現は全く見られない。「忘れ草」を詠んだ背景には、「思い続けてほしい」「忘れないでほしい」と現代のワスレナグサに託す感情がこめられている。万葉集の「忘れ草」には絶えてみられない事実であった。同じ「忘れ草」に思いを託す姿勢が上代と平安時代ではこれ程までに変わっていることを看過ごしてはならない。これはそれぞれの時代の生活感情の違いからきているものと見做される。

それにしても、「忘れ草」の万葉的な発想・用法から、時代が変わると共に古今的なとらえ方に一線を画したように変わるということは考えられない。万葉的なものから古今的なものへ徐々に変化するのが自然であり、平安時代になっても、万葉的なものが存在するのは当然のことであろう。事実、平安時代にはいってからも「忘れ草」を万葉集的な発想・とらえ方で詠んだ歌はいくつか挙げることができる。

むかしの人の母、一日片時も忘れねばよめる

住の江にふねさしよせよ忘れ草しるしありやとつみて行くべく（土左日記・二月五日〈岩波大系　土左日記〉）

これはあきらかに、亡くなった子供への思いが激しく、そのつらさを忘れさせるという「忘れ草」の効験を頼りにし

た歌である。

いひかはしける女の、いまは思ひ忘れねといひ侍りければ　　はせをの朝臣

わがためはみるかひもなしわすれ草わするばかりの恋ひにしあらねば　（後撰・七八九）

こうした歌は平安時代にあっても上代的な物の見方・俗信の名残りをとゞめているのである。ただ、上代では「恋の憂さ・苦しさ」を忘れ柔らげるものであったのが「土左日記」のように子供を亡くした親の悲しみや辛さを忘れるものにも用いているのは、新しく生じた転用であろう。

ここに「忘れ草」が「自分の恋の憂さを忘れるためのもの」であったのが、「相手が自分を忘れる原因」に変わっていった過程を表すようになったとおぼしき好例がある。

わすれ草我身につまんと思ひしは人のこころにおふるなりけり　（小野小町集・三三）[注14]

この歌は「忘れ草」を万葉的なとらえ方と古今的なとらえ方の交錯するいわゆる過渡的な例と言える。前半が万葉的で後半が古今的なとらえ方になっていることに留意すべきであろう。

「忘れ草」の万葉的とらえ方から古今的なものに移行する過渡的なものには二様の要素が見られるようである。

(イ)内容・発想に過渡的要素がみられるもの

おもひにて人の家にやどれりけるを、その家にわすれ草のおほく侍りければあるじにつかはしける　　中納言兼輔

なき人を忍びかねてはわすれ草おほかるやどにやどりをぞする　（新古今哀傷歌八五三）

これは「忘れ草」が憂さを忘れさせる・人を忘れさせる故事をもとに、万葉的発想の、自分の思いをおさえるためのものとして「忘れ草」を用いたものであろうが、既にここでは単なる歌の素材、つまり「憂さを忘れさせるだけの植物」になっているにすぎない。「忘れ草」そのものの効果を目的とした歌ではなく、歌の主体性はあくまでも宿りをする方にある。

(ロ)用法・表現に過渡的とみられるもの

すみよしにて

忘れ草つみにきつればすみよしのきしかたのみぞ恋しかりける　（祝部成仲集七六）

「忘れ草つむ」は、自分の苦しい思いを柔らげるため、恋のつらさを忘れるためにつみにきたのか、恋の相手が自分を忘れる原因となる「忘れ草」をつみとりにきたのか何れにもとれる表現といえる。しかも忘れ草、住吉、岸、来し方、と修辞上からも新味を出したものとみることができる。

わすれ草我身につまんと思ひしは人のこころにおふるなりけり　（小野小町集・三三）

もさることながら、以上のような過程を経て、記述した如き古今的な「忘れ草」が生じ、それが固定観念化していったものと考えられる。

題しらず　　よみ人しらず

住吉の岸におひたる忘草見ずやあらましこひはしぬと

も　　（拾遺・八八八）

わすれぐさ　　はつせの中納言

わすれぐさ種のかぎりははてななん人の心にまかせざるべく　（古今六帖・三八五三）

のような歌は、恋の相手が自分を忘れる「忘れ草」も「忘れ草の種」をも忌避したい心情がにじみ出ている歌である。まさに古今集的な「忘れ草」のとらえ方をしたもので、このような事例は枚挙に遑がない。[注15]

むすび

万葉集の中においては、自分の恋の苦しさ或いはつらさを柔らげるため、また忘れるために「忘れ草」に託して詠んだ。しかし古今集では「忘れ草」が存在する故に恋の相手が自分を忘れる。心情としては、自分を忘れて欲しくないため、忘れないで欲しいと相手へ要求するいわゆる現代のワスレナグサに通う用法が現れた。これは上代にはみられなかったことである。平安時代後半から中世・近世にかけて「忘れ草」の固定観念化が進むに伴って、表層的なところで「忘れ草」は展開をみせるが、紙面の関係上割愛する。上代からの「憂さを忘れる『忘れ草』」の考え方は時代が下ってからも生き続けてはいるものの「忘れ」という言葉のもつマイナスイメージが支配し、修辞上の効果を期待しての表現の定着が「忘れ草」の生命となっていった。「忘れ草」が我が国の文学の中で発想・用法・内容に、時代の推移によって少なからず変わっていったことは実例にてらして十二分に推察できることである。

因みに、我が国では中古・中世に「忘れ草」を用いて自分の思いのたけを相手に留めるべく恋の歌をうたいあげてきたが、全く別種の「ワスレナグサ」が西洋からはいってくると、文学の上でも「忘れ草」は殆ど姿を消して、明治の文学では、自分の思いを一言で表せる「ワスレナグサ」が登場し[注16]て今日に至っている。

注

1　逢事のかくかたき事としりせばいかでわするるやうにこそせましをと云を忘草の種をとりてうゑんものをといへり（『打聴』賀茂真渕全集巻七・三二〇頁）

2　忘草ノタ子ヲトッテオカウデアッタモノヲ　ソシタラソレヲ蒔（マイ）テハヤシテ此節戀ヲワスレルヤウニセウモノ（『遠鏡』本居宣長全集第七・三七二頁）

3　小沢正夫「古今和歌集」小学館　古典文学全集

4　竹岡正夫「古今集全評釈」

5　佐伯梅友「古今和歌集」岩波書店　古典文学大系

6　高田真治「詩経」上集英社　漢詩大系１二五六頁

衛風伯兮篇第四章

焉得諼草　言樹之背　願言思伯　使我心痗

7　古今六帖・三八四七にも同歌あり

8　是は萬葉にいとまあらば拾ひにゆかん住の江の岸によるてふ戀わすれ貝と云を忘草にかへかつことばも少づつかへしのみにてまたく同哥也貫之のかかる事せらるべきにあらずかつ哥も彼人のよみ口にあらず仍てけしたるはよしこれらもても後の人の書加へし事此集にあ

またなる事をしらるるをよくもよみ見ぬ人のみだりにたふとめるはおろかなる事也（『打聴』賀茂真渕全集巻七・四五〇頁）

9 貫之、萬葉の歌をおぼえずして、かくよまるまじきにあらず、又おぼえずして、此集にも入まじきにあらず、又貫之のよみくちにあらずといふもうけられず（『遠鏡』本居宣長全集第七・四二八頁

10 他に、忘れ貝五首（万葉・九六四・一一九七・二七九五・三〇八四・三七一一）

11 忘れ草三首（万葉・二四七五・三〇六〇・三〇六二）

12 小沢正夫「古今和歌集」小学館　古典文学全集

11 土左日記・二月五日にも同歌あり　但し第五句（に）↓（て）

13 奥村恒哉「三代集の重出歌とその問題」〈国語国文二十二巻九号〉参照

14 新拾遺・一二六三にも同歌あり

15 参考のため二・三例挙げておく

題しらず　　よみ人しらず

うちしのびいざすみの江へ忘草わすれて人のまたやつまぬと　（拾遺・四六六）

あひしりて侍りける人のもとにひさしうまからざれば、忘草なにをかたねと思ひしはといふことをいひつかはしたりければ　　よみ人しらず

忘草名をもゆゆしみかりにてもおふてふやどはゆきてだに見じ　（後撰・一〇五〇）

返し

うきことのしげきやどには忘草うゑてだにみじ秋ぞわびしき　（後撰・一〇五一）

16 ○上田敏訳　キルヘルム・アレント「わすれなぐさ」『海潮音』明治三十八年初出

○北原白秋『邪宗門』古酒　なわすれぐさ　明治四十一年初出　『桐の花』感覚の小函　明治四十五年

朱欒特集号『勿忘草』勿忘草　『桐の花』白き露台等々

〔付記〕引用例　万葉集は桜楓社刊「万葉集」、古今集は玉上琢彌編「古今和歌集」貞応本、他の勅撰集・私撰集は新編国歌大観によった。

福岡女子大学研究生

第八回国文談話会例会（昭和五十九年六月）にて発表。